

# 教育方法学



教育学部 教育学科 2回生

0301-0403 阪口典子

～もくじ～

第一章 チームで構想した学校

1. はじめに
2. 構想した学校について

第二章 多様な能力を持った学習者に一人ひとりの学力を高めるための具体的な学習指導方法

～子どもたちの算数学力の実態～

～学力向上プラン～

《学習指導方法》

《学習指導方法》

第三章 多様な能力を持つ学習者の学習成果をどのように評価するか

1. 評価とは
2. 具体的な評価方法  
プリント  
プリント

第四章 この講義の感想と希望

第五章 最終レポートの自己評価と公開同意書

## 第一章 チームで構想した学校

### 1. はじめに

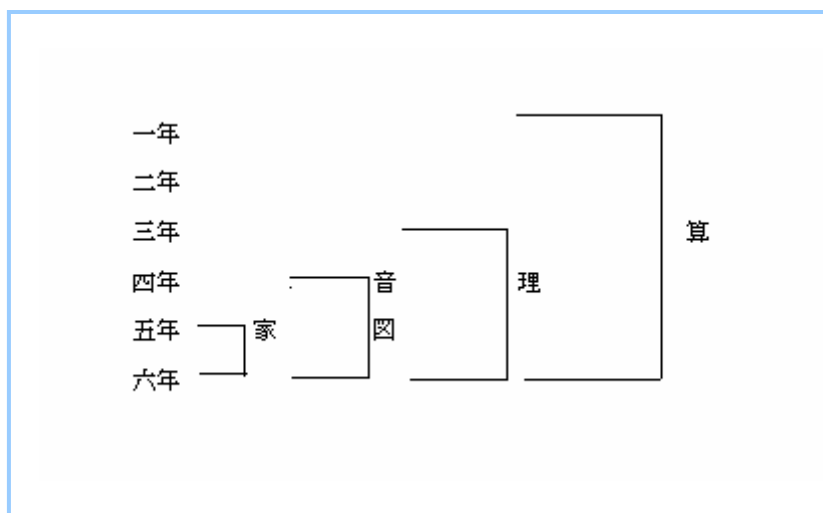
私たちのグループは理想の学校を考えるにあたって、現在の小学校に足りないことや、問題をあげた。いじめ、理数離れ、学力低下、生活習慣の乱れ、地域の人々との関わりの不足、命の教育などがあがった。それらをふまえつつ、理想の学校を考えていった。子どもたちの立場に立ち、ひとりひとりが学校を楽しんでいることができ、のびのび生き生きとした教育を中心とする学校を目標にした。

### 2. 構想した学校について

私たちの考えた学校の名前は 皆星学園 である。

“ひとりひとりが一番星”をキャッチフレーズに、児童が自分自身、周りの人や生き物を大切に、成長して欲しいという願いが含まれている。

学級数は一学年 3 クラス×6 学年 = 18 クラスである。担任は一人制であるが、音楽、図工、家庭科、理科、算数においては専門の教師が教える。そのほか、校長、教頭、養護教諭、特別学級教員、カウンセラー、栄養士、用務員らが学園の運営や整備、児童の育成にあたる。<家庭科 1 人・音楽 1 人・図工 1 人・理科 2 人・算数 6 人>

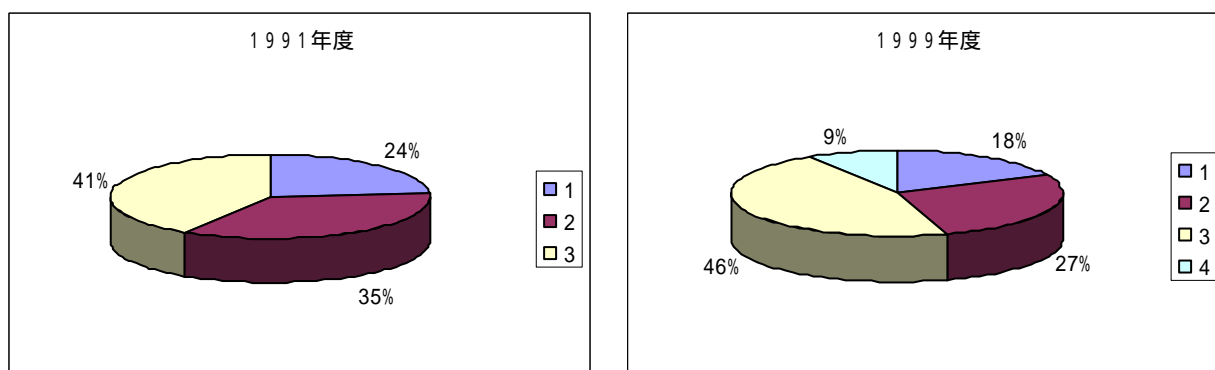


理科は基本的に担任が授業を行うが、実験などの活動など理科の楽しさ、不思議さを伝え、担任をサポートする専門の教師を置く。近年、子どもたちの理数離れが叫ばれている。しかし、その子どもたちを教える教師側は理数が得意かということ、文系の教師が多く、そうでもないとし川氏は指摘している。(※1)

理科を教える教員はまず、自然が好きであり、観察や実験に胸躍らせた経験を持ち、そ

の興奮を生徒たちに伝えたいというような人材が望まれ、それには卒業研究かそれ以上の過程である程度、科学の倫理性や面白さを体得している必要があると松田良一は言っている。(※2)しかし、2000年度入学の大学生からは新しい免許法が適用されたことや、教員養成系の大学・学部の入試教科内容を見ると、理科に弱い先生たちが大量生産され、初等中等教育における理科教育はよりつまらないものになり、理科離れは決定的なものになるだろうと予想している。そこで、専門性の高い教師を導入することで、より理科への興味や関心を高めて欲しいということが目的である。

二次試験で全定員に対する数学の貸された定員の割合(小学校課程)



(注) 1:必修、2:選択、3:なし、4:その他 (2より)

算数はT.Tで、授業を担当が行い、補助として専門の教師が授業に入る。数人の教師が授業に加わることで、児童が授業中にわからないところをすぐに解決することができ、ひとつの問題に対しても、二人の教師が様々な視点からみることができるので、授業前の段階からよりよい授業を考えることができる。そのことによって、授業中にあらゆるケースに対応することが可能になり、児童もより深いところまで算数を進めていくことができると考えている。

次に、学園の特色は以下の三つである。

### 開かれた学校

地域の方々との連帯を密にし、授業への参加や児童の安全な生活の確保のための協力を得る。最近では、児童の安全のために学校を地域から閉ざす学校が増えている。

しかし、子どもたちを隔離してしまうことが本当によりよい教育なのだろうか。児童の育成には人と人との関わりの影響は大きく、また、社会にでたときに重要であるコミュニケー

ション能力の養う機会をこの時期にもつことは大切である。学校側が地域を十分に把握しておくことも大切であるし、地域の人々との交流をできるだけ多くとるなど、日ごろから地域の連帯感を深めるように努める。

制服着用は児童の活動の妨げになると考え、規定の制服はないが、登下校時に、指定した黄色の帽子を着帽させ、地域の人々に学園の児童であることを知らせることで、児童の安全を地域も含めて守っている。そのように子どもの成長に地域の人々も参加することで、児童を共に育てる気持ちを深めていただいている。



### いのちの森、動物村

学園内には小川が流れ、虫や小魚が生息する「いのちの森」や、うさぎや小鳥のような小動物だけではなく、やぎやあひる、くじゃくなど、様々な動物を児童たち自身で飼育する「動物村」がある。

マンションなどの集合住宅で暮らす児童が多く、動物を飼うという経験をしている児童が少ないことと、生命の誕生やはかなさを家庭で経験することが、この少子化の時代、核家族化の時代では少なくなっていることが、この「いのちの森」や「動物村」を作った理由である。

また、子どもたちの自然離れが考えられる。児童の最近の遊びには、ゲームの中で、動物を育てたり、自分の虫と友達のを戦わせたりするゲームがある。本当の命の温かさを感じるころのできる環境が必要である。

自然との関わりや命の教育、遊びの中での学び（これを私たちは“遊育”と呼んでいる）を大切にする。



### 相互理解

近年、「勝ち組」「負け組み」などという言葉が流行るなど、自分自身が集団のなかでどう位置づけられているかということに重点が置かれている。その結果、自分のことしか考えず、自己中心的な人間が増える。人間はお互いささえあって生きていることを子どもたちには知って欲しい。このような世の中で本当に大切なことは、一人一人の個性を尊重し、思いやりの気持ちを育む教育でないかと考えている。

子どもたちどうしはもちろん、家族や、地域の人々との関わりを大切にし、そのなかから子どもたちが人間関係の大切さを学んでいってほしいと考えている。



これらの取り組みのひとつとして、皆星学園は学園行事を大切にしている。

## 年間行事予定

- 4月：一年生歓迎会+遠足（全学年）
- 5月：巨大こいのぼりづくり（二年生図工の時間に制作）
- 6月：いも植え（四年生）
- 7月：七夕まつり（全学年で願い事を学級会で書く。日曜参観後に竹を燃やす）
- 8月：天体観測（六年生、学校でお泊り）
- 9月：運動会（全学年）
- 10月：いもほり&焼いも（四年生）
- 11月：音楽会（全学年）
- 12月：クリスマス会（全学年、土曜日に近くの幼稚園児を招待する）
- 1月：もちつき大会（全学年、土曜日に地域の人々と）
- 2月：節分（全学年、給食時にまめを食べる）
- 3月：六年生お別れ会（全学年）

以上のような皆星学園は、

“ 出会いからの学び ”・・・人や動物、自然とのかかわりが薄れている現代に、地域に住む人々といっしょにお祭りをしたり、友達との関わりを大切にしたりした行事を多く取り入れたり、学校の中で動物や虫などの生物といつでも触れ合えるようにすることで、そこから命の大切さや、人々のありがたさ、あたたかさ、自分の存在、コミュニケーション力などを得ることで、人間として大切なものを培う。

“ 遊びからの学び ”・・・学ぶことは授業だけに限らない。子どもたちは習い事や塾などで忙しかったり、テレビゲームなど人間を相手にする遊びをしていなかったりと、体を使った人と人との交わりの中で遊ぶことが減っている。休み時間や行事などで遊ぶことの中からも、人間関係や社会のルールなど、成長に重要なことを得ることができるという考えを元にしていく。

“ 自然からの学び ”・・・今日、子どもたちの自然離れが叫ばれている。子どもたち

のおもちゃの中には、本物そっくりなかぶとむしを戦わせるゲームがはやっていたり、一度死んでしまってもリセットすれば生き返るペット育成ゲームが出回っている。これは、子どもたちに本当の自然のあたたかさや怖さ、命の重みを失わせることにつながる。そのことを回避するために、学園では子どもたちが主体となって多くの植物や動物を育て、自分の肌で自然を感じてもらふこと、いつでも自然を感じるができるようにしている。

これらの三つを学園の教育の柱とし、感性豊かな子どもを育成することを方針としている。

## 第二章 多様な能力を持った学習者に

### 一人ひとりの学力を高めるための具体的な学習指導方法

#### ～子どもたちの算数学力の実態～

荻谷剛彦、志水宏吉らの研究グループ（※3）が2001年に実施した調査によると、小学生の学力低下は、算数を4領域に分けた「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」のどの領域においても起きていることがわかった。

昨今、「読み・書き・計算の学力低下」が話題となり、算数では子どもたちの計算力だけが低下しているように思われ、計算を中心とする学習に力を入れている傾向があるが、実際は広範な領域で学力低下が起きているようだ。その点に注目し、学力低下の改善のための方法を考えていかなければならない。

「小学校算数の領域別の平均得点」のデータによると、少数は計算を苦手とする子どもが多いのに対して、分数は計算よりも概念的な理解を苦手とする子どもが多いことが読み取れた。

計算力を伸ばすために、学校では計算ドリルをさせたり、計算問題を中心とした復習プリントを宿題に出す学校は多いが、概念的なことを理解していなければ、その場は計算ドリルなどを完璧にできたことで、その単元を理解できたように感じてしまうが、そのほかの問題にあたったときに、計算を間違えてしまったり、公式を忘れてしまっている。

その際、「わからない」、「算数は嫌いだ」と子どもたちは感じてしまい、やる気を失ってしまうことが考えられる。それがさらに学力低下につながってしまうのではないだろうか。

## ～学力向上プラン～

学力の実態を知る代表的な調査のひとつに国際教育到達度評価学会（以下、IEAと略記）がある。

昨年、12月14日に公表された、IEAの国際数学・理科教育動向調査の2003年調査（TIMSS2003）に含まれている質問紙に対する回答で、数学・理科とも「勉強の楽しさ」、「勉強への積極性」、「得意な教科かどうか」、「勉強に対する自信」、「自宅で宿題をする時間」などが国際的にみてかなり低い状況であった。

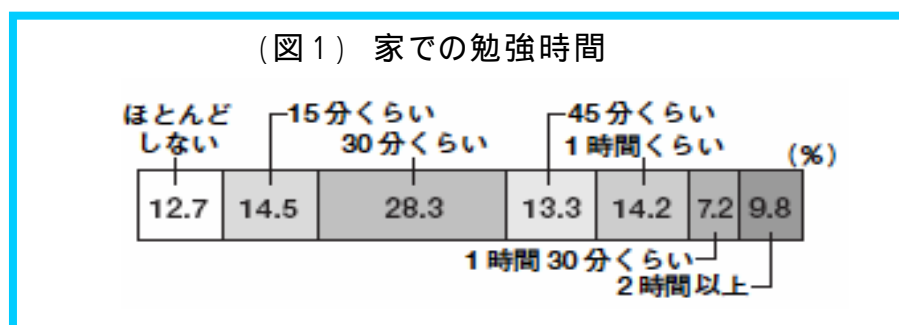
例えば、数学の勉強が楽しいかを4つの選択肢で尋ねた設問に対して、「強くそう思う」と回答した日本の中学2年生は9%で、国際平均値の29%を大きく下回った。

一日の過ごし方で「宿題をする」は中2で1時間と最低、小4は0.9時間で下から4番目。「テレビやビデオを見る」は中2で2.7時間と最多だった。

ベネッセ教育総研のグループが2003年に調査した結果（※7）によると、小学校5・6年生が、学校外での勉強量の調査にとると、一週間あたりの勉強日数は「ほとんど毎日」という回答がもっとも多く、およそ3人に1人であるが、続いて、塾での勉強を除いた一日の勉強時間を聞くと（図1）、「ほとんどしない」は12.7%、「15分くらい」は14.5%、「30分くらい」は28.3%となっていて、合計すると、五割を超え家で勉強するのは30分以下というのが多数である。

子どもたちが、学校で理解しきれなかったことを、その30分を使って解決しようとすることは少ないと考えられる。宿題の計算ドリルをしたとしても、わからないところつまずいていたら30分くらいすぎてしまうだろう。

現在、学校は週5日制になり、勉強する時間が増えたはずなのに、子どもたちには、家で勉強する習慣がついていないことがわかった。ベネッセ教育総研のグループによる、小学校6年生のテストの得点別グループに分けた、勉強を月に何日くらいしているかについてのデータ（図2）は、点数の低いグループの、ほとんど毎日勉強をしている割合は20.6%なのに対して、点数の高いグループは半数が毎日勉強していた。





(図2) 家での勉強日数(テストの得点別)

	ほとんど しない	1週間に 1日くらい	1週間に 2～3日くらい	1週間に 4～5日くらい	ほとんど 毎日	(%)
低(0～3点)	14.6	13.1	33.2	18.6	20.6	
中(4～5点)	14.0	12.6	23.7	21.3	28.5	
高(6～8点)	9.5	6.8	19.4	15.8	48.6	

### 《学習指導方法》

#### 地域の人々、保護者、学生などによる ボランティアの授業サポート

これらの結果より、子どもたちは、学校以外で勉強することが習慣づきにくく、授業でわからないところや疑問をそのままにしがちであると考えられる。

授業中の見落としがちな1人1人のつまずきを細かくサポートしたり、理解のスピードにあわすために、地域の人々や、保護者、学生などによるボランティアの授業サポートを取り入れる。

この方法は、一部の勉強の苦手な子どもだけが対象ではない。浪川幸彦(※4)が次のように論じている。「能力のある子にとって、学校の授業のすぐ終わってしまう学習は全くつまらないものでしかなく、学習意欲を失い、“おちこぼれ”の反対で、“浮きこぼれ”減少がおきている」。このような子どもたちには、学校以外での勉強時間も多いため、授業中に問題を出されても、すぐに解いてしまい、時間があまってしまう。そのときに、別に用意しておいた、少し発展的な問題プリントなどをさせ、サポーターによってみてもらえれば、その子どもたちにも学ぶことの楽しさを子どもたち自身で発見できると考えている。

この方法は、授業前後の教師とサポーターの打ち合わせは不可欠であり、子どもたちの現状の意見交換や、問題点などを話し合い、よりよい授業を行おうとするとともに、保護者がサポーターとして入ることで、普通なら知ることのできない学校での子どもたちの様子を把握でき、学校と家庭が連帯して子どもを教育することができる。

教師も学校外の人々から意見をもらうことで、教材や授業をもう一度見直すことができ、

次回の授業がよりわかりやすく、子どもたちにあった授業になると考えられる。そして、今までクラスが子どもと教師という空間であったが、第三者の目があるという刺激は教師にとってよいプレッシャーになり、よい授業が生まれると考えられる。

しかし、この方法は、子どもたちに余計に学力の差がでてしまうのではという心配が予想されるが、理解が早い子どもにはその子のペース、理解がゆっくりな子どもにはその子のペースがあり、落ちこぼれを作ろうとしてはいけないが、同じような学力を持つ子どもを作ることが教育ではないと考える。どの子どもたちにも自ら学ぶことの楽しさを感じてもらえることを一番に考えなければならない。

## 《学習指導方法》

### 学習内容のノートまとめ

大村はまは「教えない先生が増えてきている」と現在の教育について語っている。（※5）

「自分でじっくり考えてみましょう」とか、「しっかりやるんですよ」など、子どもたちの自主性を大切にしようとする教師のことばが、実は子どもたちを混乱させ、教師は何も教えることができていると指摘している。

テストのときでも、問題ではなく、それ以前でまごついてしまう子どもが多い。テストは何日にあるのか、どこへ答えを書くのか、どのような目的でテストはされるのかなども、教えることが大切であると大村はまは述べている。

では具体的にテストに対してどのように取り組むかであるが、陰山英男が行っている「テストのうけさせ方」を取り入れる。（※6）

まず、テストは遅くとも2日くらいまえには必ず予告する。「ここからここまでの範囲のことをいついつテストします」という具合に、口頭と、時には家庭向けの学級通信で予告する。

前日は宿題として、テスト調べを義務づける。その際、だいたいノート何ページくらいの学習が必要かも指示する。

テスト調べというのは原則的にノートでさせる。

なぜなら、ノートはまったく真っ白なところに自分の分かっていることを書いていくわ

けなので、そこにはその子の頭の中の理解がそのまま反映されている。ごちゃごちゃのノートであったら、ごちゃごちゃの理解であるということである。

よって、教師の授業中の板書は重要である。すっきりと見やすいように、図を使ったりすることも必要である。

テスト調べとは何か。それはテスト範囲の学習内容を、もう一度真っ白な別のノートにまとめていくことで、学習した内容を思い出させるものである。

### ～見やすいノートの作り方～

見やすいノートを作るには、鉛筆1本というわけにはいかない。まず、定規や2～3色のペンを使わせて、全体の構成が、すっきりと見やすいものにする必要がある。

だから、低学年から中学年にかけて、図形の学習や図工に学習でもこうした定規などを使う機会を増やすことが望ましい。

そうなる、実につまらないことであるが、筆箱の中身にも十分な注意がいる。

だいたいノートをいい加減にしている子は、筆箱の中には鉛筆1本だけ、定規やペンどころか、消しゴムすらはっていないということはざらである。

こうしたことがないように、年度当初から注意する。鉛筆の本数や定規の種類、ペンの種類、そしてそれらがすっきりと納まる筆箱。そして下敷き。これらは高学年になるほどいい加減になるので注意する。

ただ、これらの家庭学習には注意が必要である。それは、子ども自身が学習する意味について考えたり、自分自身で学習内容を考えさせることも意図的に時間をとってさせることである。

そうしたことをさせないままであると、子どもの学習に自立性が育たず、やがて、親の手に負えない段階、つまり中学や高校など、高度な学習に入ったときに自分では何もできないというようになってしまう危険性がある。

## 第三章 多様な能力を持つ学習者の

### 学習成果をどのように評価するか

#### 1. 評価とは

「評価というものは教師にとりましては、これから子ども達をどんなふう

ったらいいか、その「方針」を得ることである。一方、子どもにとりましては、自分自身がこれからどんなふうに勉強していったらいいか、それをしっかり持つこと、自分に指針を持つこと、評価とはこの二つである」と大村はまは述べている。

## 2、具体的な評価方法

そこで、子どもたちの学習意欲を評価するには、**自己評価制度**を用いる。

これは子どもたち自身が自分を見つめなおすことができる。どんなにいい授業だったとしても、テストの点数がよかったとしても、やりっぱなしは何も残らない。人間は反省をしてこそ成長するものである。

子どもたちにはテスト後の授業に、下のようなプリント①を配り、記入させる。毎回テスト後にこのプリントを配り、記入させ、ファイルに閉じておくことで、自分の学習を振り返ることができるようにする。

算数を苦手な強化とする子どもにとって、どうやって勉強したらよいか、どこが弱いところなのかということを見つけて自分で見つけることはなかなか難しい。社会科のように自分なりの方法で問題解決に向かっていくということも少ないし、国語のように様々な答えがあるわけでもない。そうすると、子どもはテストの点数だけで自分の学習をみてしまい、点数のよい悪いだけで終わってしまう。そうすると、テストの点数が悪かった子どもは算数を苦手だと感じてしまうだろう。そのような状況を防ぎ、子どもたち一人一人が自分の学習に向き合えるように、よりよい学習活動ができるように、この評価方法は重要である。

提出されたプリントを見る際には、特に「みんなの一言」に注意し、一人一人のがんばりを認める。このカードと、提出されたノート、テスト、サポーターの声などをふまえ、教師とサポーターで、後日、プリント②を児童一人一人に渡す。

子どもたちが、今の時期から一人で学習を見つめなおしたり、自分で学習計画を立てることはなかなか難しいので、このような形で、その方法を教えてやり、中学、高校、大人へと成長する段階で必要な、自分で自分の学習を見つめなおしたり、計画したりできる力へのステップになる。

このように、テストも単なる到達度を測るだけのものではなく、ひとつのくぎりとして自分を見つめなおし、次回への意欲を高めていくものにする。

プリント

# 算数ぼくわたしみつめなおしカード

12月15日 年 組 名前

できた 前回よりできた 前回よりできなかった できなかった×

## 授業

- 1、 せっきよくてきに発表しましたか ×
- 2、 わからないところをそのままにせずに  
質問しましたか ×
- 3、 宿題はその日のうちに自分でしましたか ×
- 4、 ノートはきちんと書きましたか ×
- 5、 忘れ物はしませんでしたか ×
- 6、 先生の話や友だちの発表を  
聞こうとしましたか ×

## テスト

- 1、 ノート整理は見やすくできましたか ×
- 2、 テストの見なおしはできましたか ×
- 3、 テストの問題でわからないところをしつもんしたりして、  
かいけつしようとしていましたか ×

## ～みんなのひとこと～

(がんばったことや、かんそう〔いいこと〕を書きましょう)



## ～先生のひとこと～

今回は、一人一人がノートをうまくまとめていました とてもみやすかったです。  
忘れ物もへってきています。次回からはコンパスを用意しておいてください。

今回は、授業のときに分数のたし算のところでしたもんをよくして、わからないところをなくそうとがんばりましたね。

でも、テストのときに見なおしができなかったみたいだね。おいしい！小さなミスがあったので、今度は授業のときから、気をつけていこうね。

ノートまとめは、自分でつけくわえたところもあって  
わかりやすくまとめていました。GOOD！この調子です！！



#### 第四章 この講義の感想と希望

エルサポートを使った授業は始めてだったので、戸惑った。最初、掲示板を使った、チーム内の連絡のやりとりはあませず、それよりは個人のアドレスを使ったやりとりが多かった。しかし、授業が進むにつれてグループで課題をする時間が取りづらくなってくると、掲示板をうまく使うことで今までよりもスムーズに課題が進むことがわかった。なかなかチーム全員が同じ時間をあけるということは難しいので、とてもこの方法は役に立った。

何人かのグループで協力し合って学習することということは、これまでも何回かしたことがあるが、今回のチーム学習は本当に学習といえたと思う。

一人一人が自分の考えを出し合い、それに対して評価したり、意見を交換したりすることが、自分だけでは気づかないことを発見できたり、同じ問題に対してもまったく違った観点からの見方を知ることができた。

チーム学習の利点はチームのメンバー一人一人の意見を交換することで、よりテーマの内容を深めることができたり、役割を分担してスムーズに学習を進めることができることである。しかし、実際にチーム学習をしてみて、一人一人が自分の役割に責任を持っていないと学習はなりたたないと感じた。

例えば、あるテーマに関して個人でレポートを考えてくるという課題を一人でも中途半端なものを作ってきたりすると、その時間の活動が進まないだけでなく、雰囲気もよくな

い。反対に、一人一人が自覚を持って、自分なりに学習してくると、討論するときも、様々な意見がでてくるので、活動がしやすく、学ぶものも多いと思う。チームはグループとは違うということを授業のなかで聞いたが、そのとおりであり、人数が多いから、一人くらい適当でもどうにかなるとか、楽しくできればそれでいいといったことはチーム学習では通用しない。この教訓を教師になったときに、教師同士の関係や子どもたちのチーム学習の指導に生かしていきたいと思う。

## 第五章 自己評価表と公開同意書

レポートが目指しているレベル A

**\*\*このレポートでアピールしたいポイント\*\***

学力向上プランと、評価方法を考える際に、学力が低下しているから、テストでよい成績をあげさせようと、その場限りの点数をあげるためのものではなく、子どもたちが成長するのに必要な継続的な学力向上の方法に注目した。

**\*\*レポートの自己評価\*\***

① 参考文献・引用文献、参照URLを示すことが **〔できた〕** ・ できなかった]

(盗作ではなく、自分の主張を展開するときの根拠として使用し、誰の文章やデータを使用するかについて表記しているかどうか)

② 「感想」(「だと思ふ」調)ではなく「論理」(「である」調)で主張

**〔できた〕** ・ できなかった]

② 読み手が読みやすいように配慮することが **〔できた〕** ・ できなかった]

(長すぎる文章を羅列するのではなく小見出しをつけたか、図や表の表示量は適切であったか など)

### レポート公開同意書

このレポートを後輩が受講する「教育法方学」で公開してもよいですか。また大学の web 上に公開が認められるとしたら web 上に公開してもよいですか。番号を選択してください。

後輩への公開について（１）

web上の公開について（１）

1. 実名入りで公開してもかまいません
2. 公開してもかまいませんが、匿名を希望します
3. 公開しては困ります

2005年1月19日 氏名 阪口典子

#### 引用文献：

- (※1)【学力から人間力へ】 市川伸一編 2003年 第1刷発行 教育出版株式会社
- (※2)【算数ができない大学生】 岡部恒治 戸瀬信之 西村和雄  
2001年 第1版発行 東洋経済新報社
- (※3)【「学力低下」の実態】 荻谷剛彦、志水宏吉、清水睦美、諸田裕子  
2004年 第6版発行 岩波書店
- (※4)【教育が危ない！学力低下が国を滅ぼす】 編者 西村和雄  
2001年 第2版発行 日本経済新聞社
- (※5)【教師 大村はま 96歳の仕事】大村はま 2003年 第1版発行 小学館
- (※6)【学力低下を克服する本 小学生でできること 中学生でできること】  
陰山英男 小河勝 2003年 第1版発行 文藝春秋

#### 参考文献：

- 【教育の方法と技術】 西之園春夫・宮寺晃夫 2004年 第一版発行 ミネルヴァ書房
- 【学力低下と新指導要領】 岩波ブックレットNO. 538  
西村和雄編 2001年 第1版発行 岩波書店
- 【学力を問い直すー学びのカリキュラムー】 岩波ブックレットNO. 548  
佐藤学 2001年 第1版発行 岩波書店
- 【学びから逃走する子どもたち】 岩波ブックレットNO. 524  
佐藤学 2000年 第1版発行 岩波書店
- 【学力があぶない】 大野晋・上野健爾著 2001年 岩波新書
- 参照URL:(※7) モノグラウ小学生ナウ <http://www.crn.or.jp-ChildResearchNet>  
文部科学省 <http://www.mext.go.jp>  
ベネッセ教育ニュース <http://www.view21.jp>